

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	山岳部報
Author(s)	
Citation	龍南, 202: 75-85
Issue date	1927-07-01
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8961
Right	

山岳部報

本年度より當部に記録簿なるものを作り部の器具を借りて登山した人及び登山した人でそのことが僕達の耳に入つた人には感想なり記事を書いて後で登る人の参考のためこのこすこととした。従つて記録簿に記載されたのをこゝに書くことは即ち部の報告なのである。故に左にかゝける次第である。

根子岳

文二甲二 赤星 平馬
 (鹿高農) 相良 廣高
 昭和二年一月二十三日

水前寺發 六時三十分
 宮地發 九時十五分
 火尾峠との歧路 十時三十分
 かしの下 十一時十分
 頂上 午後二時
 頂上發 二時三十分
 かしの下 四時三十分
 宮地着 六時十五分

連日の雪模様で阿蘇でスキーをやるつもりで出掛けたが雪が少くなそうなので變更して根子岳に行くことにした。風は相當あつたが根子に行く道は御承知の通りくぼんで居るので比較的暖であつた。雪はホソノ鹿の子斑に地面に積つて居た。併し地面は硬く凍り附いて居て相當寒いことを物語つて居た。

十一時かしの下に出て少量のパンを嚙つた。それより路はいつもなら石のゴロ／＼した所だが地面にコンクリートでかためた様に凍りついて居て案外安定だがその上に少し雪があるのでよく辻つてかへつてあぶない。ことに入口のふだん瀧のかゝつて居るあたりは水が凍り付いて居てつかまる所がなく少ならず面喰つた。からうじて谷の右側にそつて登つた。難場が二三ヶ所あつて少なからず時間がかゝつた。友の肩を借りて登つたこともたび／＼あつた。ナツシュに入る前のしげら／＼の間の斜面を登るときは槍(日本アルプス)の穂を登つて居る様な氣持ちでちよつと面白かつた。ナツリュの中は地面が凍つてその上に雪が薄

くつもつて居るのでよく辻つた。木から木につかまつて登つた。樹枝には雪が附いて櫻の花の様は美しかつたが木をその下を通るときにゆらすので雪が落ちて襟から入つて少なからず冷たかつた。根子の肩に出る少し前の所は非常に登りにく、随分時間がかゝつた。肩に出ると割によかつたがこゝなどは風が強くて困つた。今迄は山の間だったので風が餘りあたらなかつたが急にひどくなつた。

午後二時やつと目的の頂上に立つことが出来た。相當苦しいつもりだったがこれ程骨が折れるとは思はなかつた。案外つまらない所に時間を費してしまつた。頂上は風が強くて寒さも一段ときびしかつた。寫眞器の金具が寒さのために手にピツタリくつついたのには驚いた、山形や長野の冬の山にも登つたことがあるがこんなことは初めてだつた。リュックの中に入れておいた水筒の水も冷つて宮地にきて暑い湯に入れて初めてつけた程の寒さだつた。展望は餘りきかなかつた。高嶽が吹雪の中に見れてとても美しかつた。頂から少し下つた所に風

をさけてパンをとった。歸りはロープを持つて行かなかつたのでゲートルをより合せてロープの代用となし着實に少しづつ、下つた。アツシユに入つてからロープ代用をとつて出来るだけ長くアツシユの中を下まで下りた。歸りは思つたよりも樂に下れたがそれでも二三回ゲートルの御厄介になつた四時半無事下山した。

樹氷ではなく樹雪がとて美しかつた。樹氷以上だ。

九州での登山の中一番ひきしまつた登山だつた。それだけ面白も多かつた。

徒らに出が低いと言つて居るよりもドンデン登るべきであると思ふ。そこには春夏秋冬それぞれ異つた味が見出される。低い山はひくいなりに面白い。

(赤星)

宮地に於いてスキー

- 理三甲三 桑島 直樹
 - 文二甲二 赤星 平馬
 - 文二甲二 藤山 康一
- 二月六日—八日

例によつて新聞に阿蘇大雪數尺に及ぶと書きたてられたが例の駄ホラだと思つてうして氣が進まなかつた。家に居ても暖なので欺されたと思つて思ひ切つて行つて見たらこんどはほんとで立野驛あたりでも雪が澤山積つて居るのには思はず一人で微笑した。六日に宮地に行くと桑島藤山がきて居て藥專の連中と東加久(旅館名)に陣取つて喜んで迎へて呉れた。

七日には三人で早朝より迂りに行つた。

高嶽に行く途中の一本松の所が所謂宮地スキー場で豫想外に面白く冗れた。ことに夕方硬くなつてからは益々面白かつた。藥專の連中も十數名後からやつてきた。

雪質は何と云はうか、せいゝ五色や倉の三月末から四月頃の雪だ。併しこの南國でスキーが出来ると思ふと小言は云へない。

御大葬遙拜式参列のため全夜一日歸熊。

八日。一番列車にて再び迂りに行つた。今日は宮地のスキー家連がきて大部にぎやかたつた。午後から此四氏もこられてます。盛だつた。全夜歸熊。

スキー場は一尺ばかりの雪でともかくも冗れたが方々に草が出て居るので不快だつた。この位降るならば毎年十二月頃草を刈るなり焼いてしまふと一層よくなると思ふ

(赤星記)

宮地スキー

栗本先生

- 文二甲二 赤星
- 理二甲一 綾部
- 理二甲三 河野
- 理一 山本

前日より少し上の方のスロープにて迂る。鐵道省の方々。宮地の連中にてにぎわふ。全夜歸熊

阿蘇高岳

- 二月七日
- 理三乙 相賀 勇一
- 文二甲三 原 俊之
- 理二甲一 黒川 宗雄
- 理二甲一 佐渡 道隆
- 理二乙 保野 正之

理二甲二 古賀 千尋

新聞は頼りに阿蘇地方の大雪を報じて來る。灰色の雲間に見没する白い山膚の誘惑取敢へず同志を募つて高岳を計畫した。山麓は曲尺の一尺五寸、天候さへ順調ならば充分の自信を持つて居た上に防中で日光さへ見る事が出来たので決行した。四百米程先に四五名の者が處女雪を踏んで登つて居る。御影で少し歩き真くはあつたが先を越された思ひがする。

中の茶屋で英氣を養ひて噴火口新道から高岳北側登山口に進んだ。午前十時半頃より天候急變して日は雲間に姿をかくし風速は増し十一時噴火口北壁に着いた時は全く密雲の中に封じられた。高岳に進まうとしたが不安を感じて本堂に降りる事に決し噴火口壁を南進した。雪は膝を没し天候は増増險惡の度を加へ密雲は増々深くなり二間先も明視する事が出来ず唯硫黄の息氣で噴火口壁に居る事を知るのみ。

堆石の所から本堂に下つたが四十分經つても本堂に着かず岩に天下泰平と書いてあり上御池三社左佐京橋蛇腹等書いてある見

知らぬ追分を見出して道に迷つた事を知つた。再び豫定變更して自分等の足跡を傳つて全々防中に引きかへす事に決心して引きかへしたが吹雪の爲足跡消へて降口で再び迷ひ加ふるに噴火口壁で突風に遇ひ一步も進めなくなつた。そこで豫定變更して足跡を追つて引き返へす事に決心したが途中足跡は吹雪のために消されて再度迷ふに到つた。加ふるに火口壁に出た時突風に遇(三十米以上と考へられた)ふ。一同全たく弱

り一名はその頃より全く弱り果てた。此處に於て阿蘇の性質を考へて下の方に向つて猛進する事に決心して一同勇氣を奮起して進んだ下るに従つて雪は深さを増し尾根を進む可きか谷を進む可きかに説が分れ先づ尾根を下り進む不可能を知り谷に下る此の頃から先きの一名は全く弱り危險状態に迄陥つた二名で助けつ、下るとその二名が弱り一時全く不安態となり葡萄酒で正氣を取り直しては進み行く先きは暗雲の中にある全員放心状態を續くる事小一時間遭難の豫感の如きものが心の奥に芽生て來さえした四時廻る事半時先頭の一名によつて路あり

と呼ばれた時やつと助かつたと云ふ感がした。防中着が六時半、今一時間後れば果してどんな結果に至つたかと思ふと恐ろしい様だ。先の一名は防中驛前で一時間半程休憩してやつと正氣を取りなほした程だつた命あつたわけで全くの遭難だつた。

阿蘇中岳

二月八日

栗本先生

佐渡記

理二甲一 越智 恭二

理二甲一 綾部 正

理二甲三 河野 康雄

山本 秋雄

真白に雪を被つた阿蘇外輪山を見てはちつとして居れぬので遂にこの行を畫だてた早朝立田口に行く途中雪が降つて居たので多分頂上は大霧だらうが行ける所迄行き早く下山して宮地にスキーなしに行くことにした。立野驛を過ぎた所で様子を見ると中岳はおろか杵島、往生さえわからぬ、位の密雲であつた。然し相賀氏等の話を聞き充分防寒の用意をして居たのでかなり心強か

つた。防中驛で下車した頃はいくらか雲も薄らぎ日の光りをさへ時折洩れて居た。初めて雪の中を歩むのだ。サグリ／＼と砂とは又異つた感じを興へる雪の上に大きな穴をこしらへ乍ら歩く時の氣持は全く言ひ表すことが出来ない。餘り多く着込んで居たため森を抜けて草地に出る頃には額に汗が少しにじんで來た。こんな場合身体が汗で濡れては大變だといふのでマントをぬぎ上衣まで取つて登つた。少し急いだためかも知れぬ。中の茶屋まで來ると雲もすつと高くなり噴火口あたりさへぼんやり見ゆる位になつた。實際廣告の通り此處からの眺望は實にいい。雪を戴いた外輪山ははつきり見え久住山それに祖母らしいものまで見る事が出来る。こゝで蜜柑を少し食へて再び途につく。上の茶屋あたりに來ると今までの薄曇りが急に厚くなり杵島は全く姿を消し吹雪さへ伴つて來た。勿論先きの方は見當が付かぬ。空腹を感じるのが雪中登山では非常に危険だと聞いて居たので少し早いが中の茶屋で晝食を攝る。パンを僅かばかり残して卷すし（之は栗本先生御夫人の

御手になつたものである。）を全部平げて元氣を付け足跡を頼りに進行を續けた。言ひ後れたが我々より先きに五六名の團體が登つて居た。其の間は中の茶屋と上の茶屋位であつた。であるから時々足跡を見失ふ事もあつた。愈々草原地帯を終り熔岩の上を歩くことになつた。丁度尾根になつて居るので路の上には少しも雪がないが左側の谷は殆ど路と同高位までに積つて居た。突然河野君が帽子を風に取りられ雪溪の上に落された。腰のあたり迄埋る雪の中を歩いてやうやく取り返へした。噴火口近くなつてよく見ると方向を誤つて居るらしい。今迄見た事もない様な岩壁にぶつゝかつたのである。然し足跡らしいものは續いて居る。兎に角今迄の方向より右へ四十度位方向轉換してゴロ／＼石や雪溪を幾つも渡り硫黄の嗅ひのする所迄來た。噴火口だ！嗅ひでもわかるが、土地が岩でなくて火山灰である然し全く凍つてよく迂り却つて危険である、殊に雪溜りの上に灰が覆さり一見土地の如く見え乍ら踏むとずぶりと膝頭まで没入する。こゝに至つて山本君が動けなく

なつた。然し幸ひにも、それは單に眼鏡の曇りからであつた。いくらふいてもすぐ薄暗くなり風も非常に強く、火口壁に立つて居られなくつて四つ這ひにならねばならぬ位なので一時は彼れの動作が不活潑になつたのを見て少なからず心配した。本堂の方へはともに行げぬので直ちに下山今來たらしい道を下る足跡は消えて居た。再び草原地帯に入ると急に精神の緊張が弛んで無駄な時間を費すのに多忙であつた。雪の上でわざと轉んで見たり深い所へ踏込んで見たり。今迄の不安状態と較べて見てこんなに呑氣になれるものかと其の變り様の甚しいのに驚いた。そんなことをしながら途中西嚴寺に立寄り、午後三時五分に坊中驛に歸つた。

幸ひ一行中誰れも故障なくて下山出來たので非常に嬉しかった。

綾部記

春期登山計畫第四班 九重由布面第一部

三月十三日 班員 文二乙 古川 前田

理二甲一 佐波

文一甲一 中山 森田

文一甲三 山本 鎌田

文一乙 遊山 三浦

理一甲一 岩永 田崎

宇都宮 興津

山本

十三日

十二日の出發豫定を雨の爲め一日延べたため班員減じ宮地より瀬本迄の速度順調。昨日の雨で泥濘膝を没す、歩行頗る困難なり。立山坂より一里程の所迄天候險惡にして時々雨滴の落つるあり。それより次第に天候回復田尻二本松附近に於て青空を見益益晴れ渡る天候險惡なる時は田尻より久住町に路を取らんとせしも天候回復の爲め瀬本にて二三名の者の食量乏しきを知り互に分配し合つて腹を満たす。然れども充分に満すを得ず。宮地にて食量(パン)を買ひ込

む答なりしと云ふ。余は此處に於て始めてそれを知り且つ驚く。

先づ法華院迄無事ならんと山に掛る雲全く取れ理想的の天候なり。山頂所々に殘雪多きを知る登口第一尾根に於て木々に霧水あるを知りフィールドグラスを以てそれを見その美麗なるに驚く晴天に於ける霧水は余も始めてなり。第一のヤツグザツクに於て既に數名の者弱る。食量不充分なる爲めならん。第二のヤツグザツクに於て二三名を除いては殆ど全部弱る。山の北斜面は一面雪にして所々に雪溪かゝる。第一第二のヤツグザツクに於て甚しく時間を取り法華院下り口に來る時既に六時に近し。早く着きし者三名久住を一氣にと取り付く。然れども空腹の爲め疲勞甚しく久住頂上六時なり夕陽正しく西山に没せんとし北より西にかけて雲海あり。大船鶴見由布の諸山雪に被はれて壯麗なり。法華院降り口迄雪溪を滑りて下る。降り口より直に大なる雪溪ありて傾斜甚だ急なり。前に進める二名この雪溪にて滑り停らんとすれども停まる能はず益々加速度を得て下にありたる岩に一名は

當り一名は幸にも外る余はピッケルにて雪溪を滑らんとしたるに次第に加速度加りたる爲めピッケルの持方を變へたり。その時ピッケル効を奏して雪溪深く固定し急に止まりたる爲手よりピッケル抜け雪溪を失の如く滑り前に當りたる岩にて腰部を撃つ。幸にして輕傷なりしと責任ある身を顧み氣を引き立て下を見れば一名顔面血を浴びて倒れ居れるを以て驚き上を見ればうめき聲あり驚き近づけば傷甚しきが如きを以て余は法華院に急を告げんと考へ傷者を一同護る可きを告げて法華院に走り下る、法華院の上の谷の兩岸の傾斜急なるに雪ありたる爲め危險なるを以て谷の水中岩石上を飛び下る。時に日沈み月光あり。法華院に着き二名救援を頼み山に登らしめ余も登らんとしたるに足部の感覺なきに驚きその事を傳へたるに山の方は大丈夫なるを以て休み居れとの事なるを以て上りて体の暖を取りたるになかなか降り來る者なし暫らくありて一名來たり尙暫らくして一同來る。時に十時幸にして甚しき傷なし。然れども先の行程を續るは危險なるを以て久住町に出で竹

田より汽車に乗る事として一同寝につく。

十四日

九時三十分余は熊本に歸る事として法華院發。昨日慘狀のありし所を通り見るに百米程滑り居れり覺えず頭髮の倒立するを覺ゆピッケルを以て二三度滑り眼鏡二個を探せども見出す事を得ず。雲中の九重を獨り歸る無事三時四十五分宮地驛に着く事を得た。

佐渡記

春期登山計畫第一班 南九州方面

三月十一日 班員 文二甲二 瀧口 隣

理二甲一 越智 恭二

綾部 正

理一甲一 堀 界

十一日

午前二時十六分上熊本發急行により南下吉松を過ぎ鹿兒島に近づくにつれ、朝霧晴れ快晴になる。路上夏服の學生を見る。寒暖計は餘り騰つて居ないので流石は鹿兒

島であるなと思ふ。午前七時五十五分鹿兒島着市街を一通り見物。九時二十分發川

内線によりて伊集院に向ふ伊集院にて直に私設鐵道に乗り換へ十一時五十五分加世田にて下車直ちに枕崎に向ふこの間風景の觀賞をなす豫定にて徒歩によりしも全く裏切られた、これも地圖の見方の誤りであつたこの間は定期自動車ありこれによれば一日にして枕崎を通過して開聞の麓(穎娃)或は脇浦まで行く事が出来この方がずつと時間

努力に於て遙かに經濟的である然し枕崎一泊としてこの附近の海岸の景色を賞するものもその効果は大なる事と信ずる。我々は枕崎にて高等女學校の菅直室に泊る積りであつたが栗本先生の紹介状とそこの校長が故竹内正雄君(五高生)の親戚であつたため意外の款待を受け先生の御宅に泊めて載き、翌日雨天のため厚顔にも晝食迄載きその上色々途中食量迄リュックに詰めてもらつて雨中傘を借して戴き自動車乗場に着く、途中測候所にて午前中は保證の限りにあらずれども午後は次第に真くなるべしと知つて穎娃迄來く事に決す。車外の展望は雨のた

めきかなかつた。

四時半穎娃着谷川旅館に投宿
十三日

午前八時三十分迄天候不定九時半出發荷物には宿にあつて水筒辨當のみを持つて行く。脇浦に十時半着。直ちに登山。頂上は十二時廿分。頂上よりの眺望は格別であつた。昨日からの雨雲は全く姿をかくし日本晴の上天氣である。櫻島が見える高千穂韓國の

諸岳南の海上遙か水平線上にはその雲は全く霞にとざされた屋久島が雲を山陰に白く輝やかし巍然として頭角を露はして居る。近くは穎娃から脇浦迄の海岸線池田湖總べて皆一望の下にあり春らしき氣分に充ち満ちた姿を以て我々に接してくれる。何時迄も居たいのは山々なれど制限された時間は残念ながら容赦なく我々を歸路に付かしめた。一時間にて下山す、四時五分穎娃發自動車にて憧れの指宿に六時着高砂旅館に泊る。指宿は象皮病と蠅虫の流行地なる故餘り感心出来ない所である。故に我々は此處の湯にては充分回復出来ず就寝した。

十四日

午前八時指宿發鹿兒島灣内航路船により午後一時鹿兒島着。途中筆者は散々參つて内臟は空になつた。舟に弱い人はこの間自動車陸路を取るが可なり。

一時半機橋より發動機船により武に二時廿分着同日は櫻島岳は雲にて中腹以上見えす。夕方より雨さえ降つて來た。袴腰の附近にて溶岩を見學して引き返す。

十五日
やはり櫻島岳は昨日同様上半は雲中に没れてゐる。

霧島の方から密雲がどん／＼襲つて來るので晴れさうにも思はれなかつたが行ける所まで行く事にして八時四十分出發二百米毎に鹿兒島高女が建てた標がある。「止るな急ぐな後れるな」とか「山は汝の全精力を要求す」とか「もう一息だ」とか言ふ様な登山の注意が書いてある。聞けばこの山でリレー競争をやるらしい。流石は鹿兒島だと感心した。阿蘇にもこんなものがあつてほしいものだ六百米以上は二三間先が見えないがこゝで中止は遺憾だといける所までと八百米のあたり迄來ると恰も吹雪中にで

も居るかの様な寒さだ。着て居るものは汗ばんだ夏シャツと冬服上下手先はかじけて感覺無く風は強くて耳のあたりでヒューと鳴つて居る。一一〇米の標まで來るとほつとする間もなく風のため噴火口跡中へ吹き飛ばされさうでせめてもこの文字と共に記念撮影をやりたいが残念乍ら岩陰に寄り草鞋を履き換え直ちに下山、晝食も何にもあつたものではない。あまり急いで山岳部の名刺を張るのをわすれたのは返へすゝも残念でならぬ六〇〇米のあたりで晝食した。二三米の上方を霧がスーッと飛んで居る灣内は深い紺色をして昨日の荒れの名残りは少しもなく靜まりかへつて居る武附近の畑には白い花が一面に咲いて殊に目立つ。直ちに發動機船により鹿兒島に歸り山形屋吳服店食堂にて怪しき解散式を行ひ三時五十分鹿兒島發の列車にて各自の方向へ向ふ。

綾部記

第三班祖母久住方面

班員 文二甲三 寺川有三 旗田 巍

文一甲二 奥田 繁

文一甲三 窪田 實

第一日 熊本―立野―高森―津留―五ヶ所

第二日 雨の爲五ヶ所に逗留

第三日 五ヶ所―祖母山頂―尾平

第四日 尾平―竹田―久住

第五日 久住―久住山―久住で解散

第一日 快晴 立野に下車し高森まで根子岳を左に見つゝ、自動車を走らす。高森で下車し阿蘇外輪山を越す。噴煙物凄く見えて氣味が悪かつた。津留迄長い道であつたが初日のことで相當に疲れた。津留で祖母中腹の五ヶ所の炭焼場をきいて日暮の道を歩いたが五ヶ所本村で暗くなつた。宿屋にも泊る所がない爲元氣を出して炭焼場まで行く、途中の山路は雨の爲で悪く淡い月の光を頼りにたどりついた。圍爐裏で飯をたべ各川の音を聞て一緒にくるまつてねた、
第二日 起きると一面眞白く雪はまだふ

つてゐる。山は姿をかくしてゐる。仕方なく一日をこゝでトランプをしてすこす。午後雨となる、

第三日、晴れる見込が立つて十時出發、昨日の雨で幸に笹の葉の雪をおとしてくれた、風穴を見たが中には這入らなかつた、雪は次第に深くなる、風穴をはなれてから路を失ひ、只上へ上へと登つて行つた。霧は晴れず遠見は全くきかず、木につかまつて登つた、風穴から上には美しい霧氷が花の樣について居つた、相當の危険をおかして、午後一時頂上に立つ、霧は折からの東風で見ると晴れ久住山、大分の海、阿蘇霧島、と次から次とあらはれて來た、實に雄大を極めた景色で、九州の高山を一目に見ることが出來た。晝食し、暫く休んでこの景色に見とれた。下りは武夫原頭をうたひ路について走つた、雪が二尺五寸位あつたがこるびながら、すべりながら走つた、暫く行つて氣がつくと、路を西に行くのを東に行つてゐる、引きかへす譯にも行かすとにかく、西の方に、家が見えるので笹をおしわけて雪をすべつて下つた、しかし

度々崖の上に出てはまはり、いくら行つてもはでがなく、次第に不安が益々爲峯に又上ることにして笹をわけて登つた、下りにはすべつて降りた所も上りには大變な苦勞で疲れは益々度々雪の中にくるびお互に勵まし合つて、遂に峯つたいの路に出た、今後路の無い所は絶対に行かぬことを約して行きつく所に行くとして山を下つた、幸にして霧がない爲路失ふことなく、日がくれて、小さな村についた、明るい月が山の間に見わたが今日一日の危険を想ひ出すと、全く恐ろしかつた、その夜はこの村の嶺山技手のお世話で見すばらしい宿屋に泊つたが、風呂に入り晩飯を食つた時は生きかへつた心地がした、谷川の音がすぐそばで聞こえるのをきいて眠つた、

第四日、早朝谷間の村を出た、新道路が盛に工事中でこの嶺山の有望なのが思はれる、小原小學校で晝食親切な先生方は、お茶、みかん、それに漬物まで出して呉れた、竹田に行く道もよくきいて厚く禮をのべて別れた、夕方竹田着、特別に自動車な備つて久住に行く、途中から雨がふりだし

た、久住町の郵便局長さんの御世話で宿に泊り久し振りで御馳走にありつき、風呂にも入り、ゆつくり寝た、

第五日、雨は止んでゐたが險惡な雲行であつた、行ける所まで行くつもりで郵便局長の名刺を貰つて久住山麓の種畜場長に會つてくはしく路をきいて行く、霧深く、久住山は全々姿を見せない、空は益々怪しくなる、山にかゝつてからは度々霧がおしよせ洋服も何も、白くなつた、こゝにも霧氷は美しく光つてゐた。霧氷をかんで上る山の天氣は見る間に變はる。晴れたかと思ふと又後からくもつて來る、實に氣味がわるい、元氣を出して頂上をさしてすゝんだが殆頂上と云ふ所まで行き大きな溪に行き當つた。皆經驗はなかつたが行けるまで行かうと杖で足場をつくつて半頃まですゝんだが天氣は益々悪く一足はずすと大事になるので、残念ながらバックして、久住にかへつた。爲に豫定の計畫を變へて、こゝで解散することにし寺川君、窪田君は竹田に出て大分の方にまはり、奥田君と僕はがん張つて宮地までかへつた。

(旗田)

根子岳

四月二十四日

文三甲二 赤星 平馬

相良(校外生)

二十四日朝一番の汽車で宮地に向ふ。龍田口より理科三年の越智君が乗る筈であつたが遅刻したらしく姿を見せなかつた。九時宮地着。直ちに根子に向ふ。天氣が非常によくとても曇くてたまらなかつた。のんきな山歩るきにはもつてこいの天氣だ。十一時半がしの下清水の流れる所で第一回のにぎりめしをたべた。たべをわつた頃三人の登山者がやつてきた。入れ變つて出發した。路を知らないらしいので岩の上にしるしをしてやりながらゆつくり登る。今年の冬の登山にくらべるとまるで樂なのにびつくりした。今見るとくだらない所をとつても時間を費して登つてゐる。二人でその當時のことを思ひ出して話しながら登つた。澤は去年の秋よりもずつと崩れて地形が大部變つて居た。冬期の凍結のための崩壊作用のためらしい。従つて足もとが非常に不

安定だつた。それだけ又面白い何となく新しい山に登る様な氣がした。一か、へもある様な石を押すところげ落ちる様な不安定さだ。そんな石をおとすと摩擦のためにあたりがキナ臭くなる。十二時半頂上。風がなくてひなたボツコには少々暑い位だ。他の登山者もついで登つてきたが直ちに下山した。後は僕等の天地だ。泣かうと叫ぼうと勝手だ。下から持つてきた水を紅茶わかしでわかして紅茶をいれてのむ。たまらないうまいなかつた。水谷有田屋のくらべものにならない位のうまさだ。頂上近くにあつたむしろを岩かげにして山を見ながら歌をうたつたり考へたりたべたりして居る中にいつの間にかうとくと眠つてしまふ。三時半頃眼をさまし別れの紅茶をいれて四時十五分下山の途につく。どうせ汽車は八時二十分の最終列車なのでつ、ちを揃つたり石楠花をとつたりしてゆつくり下る。山を下つてからは董をつんで花たばを作りながら宮地に向つた。宮地に着いたのは七時ゆつくりと充分に山の氣をすつてきた。

久住山天幕旅行

文三甲二 赤星 平馬

文二甲三 大塚

文三甲三 前田

理一 金瀧

一、四月二十九日 熊本六時發——宮地九時——立山坂下十時半——瀨本三時——

露营地三時半

一、四月三十日 露营地七時半——久住頂上十時——法華院十二時十五分前——平

治山二時——大船山四時十五分前——露

营地五時

一、五月一日 露营地七時四十分。——久

住山製練所九時瀨本十一時半——宮地五時

第一日 九時宮地着。直ちに出發。宮地

の町を出ると例によつてひれくれた道を立

山坂に向ふ。十時半坂の下の谷川に出るこ

れから少しばかり水がないので、こゝで少々

食事をして行くことにして少憩。二三十分

後出發。今日の一番困難な外輪山に行く路

だ。少々急だが短いので餘り苦しくない。

上に出ると目さす久住が眞向ふに見えるの

が實に嬉しい。それにつゞくやわらかな高原。僕の大好きな高原の一つだ。坂を登つたための汗もこの高原を吹く風にさらされると一いきにひつこむ氣がしてしまふ。外輪山の下には坂梨村のあくせんとした村と何か物をきくとおこつた様に氣短かに云ふ人の世界があるのに一寸坂をのぼればこゝは又別天地だ。例によつて山にみとれてしまつて山のみが僕の世の中の様な氣になつてしまつた。少憩の後出發。路はうれ／＼とした高原の路。前には久住。後には阿蘇歩く所は僕の大すきな久住高原。何とも云へない、いゝ氣持ちだ。夢中で歩いて居る中に少し下り坂になつて小川に出た。十二時。こゝで少憩。又同じ様な美しい原を瀨本に向ふ。ふりむくと根子のキザ／＼した山陵と高嶽中嶽が次第に遠くなつてきて居て前の久住が大部はつきりとしてきた。三時瀨本着。こゝで食事。最初の目的は久住山上の池のあたりで天幕をはるつもりだったが薪。寒氣。及營林署の區域でやかましい等の事情で瀨本を流れる川の少し上手に天幕をはつた。初めての人達だったが非

常に早くかたづいて五時半には明日の靈食もたいてのんきに草原によこになつて暮れかゝる久住山とはるかに阿蘇をのぞんで歌を歌つたり思ひにふける。こゝうやつて暮れかゝる山を草の上になれこゝろんで見ながら歌をうたつて居るのが僕の大好きなことの一つだ。否一番すきだ。このときに自然の偉大さをつく／＼僕は感じる。八時頃あた、かき眠りにつく。夜中少々寒く三時頃眼をさましたが又眠につく。

第二日五時起床。直ちに朝飯をたいてくひ、七時半露營地を出發。割に早く出發出來たのはうれしかつた。川をわたり尾根にそつて松をかきわけてひたすら登る。十時目的の久住山頂につく。三十分程休憩。それより直ちに下山。法華院に向ふ。途中左渡氏一行遭難の蹟をとり十二時少し前法華院着。宿主に今春の遭難當時御世話になつたので厚く禮を云ふ。こゝで晝飯を食ふ温泉は浴客で満員であつた。その人達が又見世物の様にじろ／＼僕等を見るのには少々きまりがわるかつた。卅分餘り休んで後平治大船に向ふ。所々に牛の骨の轉がつて

居る混地を横切つて進むの豫定は大船山の upper 天幕を張つて寝るつもりだったが昨日の寒さと明日の行程の長さを考へて麓にとまることにして荷物を置き水筒と菓子を持つて登る。卅分足らずで大船と平治の鞍部に出た。こゝより平治の頂までは道がなくひたすらまつすぐに登る。二時頂上に立つこの山は割に平凡な山だが、北西にあるので眺めがちがつてちよつと面白い。こゝからは大船の頭が見えなかつた。この頃より天氣面白くなく雲が低く盛にとんで明日の天氣が怪しく思はれた。時間が早くないので餘りゆつくりして居られずしばらくして直ちに出發。まつすぐに鞍部まで下りそれより立派な道で大船に向ふ。四時少し前大船の頂きに立つことが出來たが時間がおそいのですぐ下山した。雪が盛にとんだが餘り眺望は妨げられなかつた。五時十分前本日の露營地着。十分の休憩後天幕をはるもの、米をとぐもの、薪を切るものなど手分けして六時半頃には食事をすました。今夜は此度の旅行中の最御馳走の飯で、おそれおほくもコンドボーフライスカレーと

云ふ怪しげなおかずだつた。現金なもので今まで菜の悪い時には餘り食はなかつた人達もこの時ならぬ御馳足に四人で一升二合餘りの飯を平げた。天氣は餘り悪くならないのでランプを持つて法華院の湯に入りに行つた。主人から春の五高生遭難談をきかされて漬物をもらつて八時半頃ひきあげて寝についた。

第三日 天氣が餘り悪くなく曇つたり晴たりして居た。今日はゆつくり出發出來るつもりだつたが考へて見るとそうゆくりつも出來ず例によつて五時起床七時半に一夜の宿をたゝんで出發した。三ツ又の麓を廻つて九時硫黄製練所着、十時半黒岩と久住の尾根との鞍部をこへて十一時半瀬本着。こゝで晝飯をたべ高原の宮地へといそいだ五時半頃宮地の町に入り北田氏宅で晩飯を御馳走になり八時二時分の汽車で歸熊。

(赤星記)

○前にも書いた通り今年度から登山記録簿なるものをそなへて後に登る人のための参考とすることにした。良い案内書のない九州の山ではこんなものでも大いに参考になると思ふ。五高生で山に登つた人はどうかこの書に記事なり感想なりを書いてもらひたい。委員の所まで申し込んでもらへば喜んでいただくつもりだ。どうか澤山の人が山に登つて有益な記事を書いてもらふことを希望する次第である。

(赤星)